

# 小林信一先生のご退職にさいして

関西国際大学教育学部客員教授

塚原修一

## 1. 筑波大学の社会工学研究科

小林信一先生との出会いは筑波大学において1979年と記憶している。そこは新構想大学で、教員（研究）組織は学系とよばれ、学生（教育）組織は学士課程が学群とそれを区別した学類からなり、大学院は修士課程と5年制の博士課程にわかれていた。小林先生は第二学群の比較文化学類（人文学部にあたる）の4年生で、博士課程の社会工学研究科に進学して指導を受けたいと社会工学系の山田圭一教授のところへ相談にこられた。私は1978年からこの研究科に所属していて、研究室の先輩として同席した。社会工学は、筑波大学の前身である東京教育大学には対応する学科がない新設の領域である。初期の大学院生は、私を含めて新任の教員との人間関係によって在籍した者が多かったが、小林先生は学内から進学した生え抜き世代のはじまりである。

社会工学類は第三学群（理工学部）のなかにあった。山田教授は東京大学工学部応用化学科の出身で、西ドイツに留学して物理化学と哲学を学ばれ、専門は技術論と研究開発論である。研究開発の人員や資金において理系の比重は大きく、研究開発を論じれば理系が中心となりがちになる。これに対して、比較文化学類は文学、地域、思想の3専攻からなり（竹村，2005）、小林先生は思想分野の出身である。人文系からの転入は珍しく、大丈夫であろうかと思いましたが、進学されてすぐに杞憂であることがわかり、活発で仲がよい同期の3人組のひとりとして存在感を示された。私は1982年に就職して筑波大学を離れたが、その後も山田教授の指導のもとで小林先生との共同研究を続け、のちに成果の一部を塚原・小林（1996）にまとめた。小林先生は朝子さんと結婚され、1986年に筑波大学哲学・思想系の助手となって大学人の途を歩みはじめられた。

## 2. 小林先生の研究活動

山田教授は研究室の指導方針について、「自分でテーマを決めて、自由に研究するというヨーロッパの伝統的な大学のあり方を引き継いで活動を続けてきたため……さまざまな分野に17人のプロフェッサーが巣立った」と述べるが（山田，2020，199-200頁）、まさにその通りであった。このうちセンターに関係する者は、小林先生、荒井克弘先生、山本眞一先生と私であろうか。この4人を位置づけるために、一方に高等教育論、他方に研究開発論（科学技術政策、科学技術社会論などを含む）をおいた軸を想定すると、大学入試の専門家である荒井先生は高等教育論に近く、小林先生は対極にあつて研究開発論に近い。山本先生と私は両者の中間に位置すると思われる。

広島大学の研究者総覧から小林先生の学術論文と著書等出版物を抽出して、1) 題名に科学、技

術，工学などの分野名があるもの，2) 題名に研究など教育以外の活動名があるもの，3) それらが  
ないものに整理した結果を表1に示す。右端の合計は1) と2) が約4割，3) が約3割で，1) と2) の  
双方に該当するものがある。

表1 小林先生の学術論文・著書等出版物の題名による整理 (%)

年 代	1980	1990	2000	2010～	合計
題名に科学などの分野名があるもの	28.6	41.8	34.4	50.0	40.8
題名に教育以外の活動名があるもの	42.9	38.2	43.8	30.3	37.3
それがないもの	28.6	29.1	25.0	30.3	27.9
学術論文と著書等出版物の合計数	14	55	64	68	201

出典：広島大学の研究者総覧から2021年10月15日に抽出して筆者が作成した。

注：上記から重複1件を除き，学術論文172件と著書等出版物29件を対象とした。

年代による変化ははっきりしないが，1980年代には科学技術より研究の語がよく使われている。  
研究者総覧から学協会の所属年をみると，研究・イノベーション学会（1985年），日本高等教育学  
会（1997年），科学技術社会論学会（2001年），日本工学アカデミー（2003年），日本工学教育協会  
（2012年），日本教育社会学会（2019年）となり，研究開発論に関連する学協会が多く所属年もより  
早い。これらは前述の推測に沿うもので，他者と比較するまでもなく，高等教育研究者の一般的な  
姿とは異なる独自性がみられる。

### 3. 高等教育論と研究開発論

一般に，新しい領域の発展には他の領域とは異なる独自の研究課題が重要である。高等教育論は  
高等教育を対象とする研究領域であるが，国ごとの制度や，高等教育機関，個別の事例などを研究  
対象とすることが多い。一方，研究開発論や科学技術社会論は，学部や学科にあたる，さまざまな  
専門分野に注目することが少なくない。すなわち，これらにまたがる調査研究活動は，高等教育全  
般とその主要な部局の，双方にわたる理解を深める機会となる。

日本の高等教育政策は，学長のリーダーシップのもとで各大学が個性を発揮する方向にある。こ  
れには高等教育の全般にわたる目配りと学内の部局間の調整が求められ，とりわけ後者には各学部  
等の理解が不可欠である。こうした事案のなかに，高等教育論の専門性が発揮できる余地があるよ  
うに思われる。高等教育論と研究開発論にまたがる小林先生の研究活動の意味が，あらためて考察  
されてよいのではないか。

末尾になったが，小林先生のご退職をお慶び申し上げる。朝子さんをはじめとするご家族のご努  
力と，センター関係者のご協力によってセンター長と副学長の重責をまっとうされたことに心から  
敬意を表したい。高等教育論と，その拠点であるセンターのさらなる発展を祈念する。

## 【参考文献】

竹村喜一郎（2005）「比較文化学類の現状と課題」『筑波フォーラム』第70号，55-58頁。

塚原修一・小林信一（1996）『日本の研究者養成』玉川大学出版部。

広島大学（2021）「研究者総覧 小林信一」

（<https://seeds.office.hiroshima-u.ac.jp/profile/ja.fc73a4d03ababded520e17560c007669.html>）

山田圭一（2020）『プロフェッサー世界を翔ぶ―山と空に逝った仲間たちに』クレオ。